武田信玄（一）

新田次郎

新田

新田次郎全集 15

信玄(一)

新潮社版

武田信玄（一）
新田次郎全集第十五巻
昭和四十九年十月二十五日発行
昭和五十二年二月　二十　日六刷
定価九五〇円
著　者　新田次郎
発行者　佐藤亮一
発行所　新潮社
東京都新宿区矢来町七一〒162振替東京四—八〇八
電話業務部03（266）五一一一編集部03（266）五四一一
印刷　株式会社金羊社
製本　神田　加藤製本

© Jiro Nitta, 1974, Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

風の巻　5
林の巻　307

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

武田信玄

（一）

風の巻

早春孤影

晴信は石水寺へ馬を走らせることが好きだった。ここは彼が生れたところであり、武田の館のある躑躅が崎から、馬を走らせるに丁度よい距離でもあった。

晴信は石和甚三郎と塩津与兵衛の二人を従えていた。石和甚三郎も塩津与兵衛も板垣信方の家来であったが、晴信が初陣の手柄を立てた海之口城攻略戦以来、晴信の傍に影のごとくつき添っていた。それは板垣信方の意志であり、信方の意向は二人を通じて晴信に伝えられ、晴信の動静もまた、二人を通じて信方に通じていた。だから、晴信は、ほとんど、父信虎や、信虎を中心としての世の動きから、隔絶されているように見えながら、実は、かなりよく、実情を把握していた。

「晴信になにが分る。あの臆病者めに」

晴信は栗毛の駒に身を伏せるようにうちまたがって走りながら、父信虎の声を背後に聞いたような気がした。

信虎の眼は赤く濁っていった。濁った眼で彼は長男の晴信を憎み、次男の信繁を盲愛していた。晴信が十六歳の初陣に海之口城主平賀源心を奇計を以て討ち取ったが、城はそのままにして帰って来たことを、信虎はことあるたびに、晴信打擲の材料としていた。臆病者め、それほど命がおしければ、僧にでもなったらよかろうというふうなことは、晴信の顔を見るたびにいった。いうだけではなく、既に元服して三年もたっている晴信を、軍議に参加させようとはしないのである。老臣たちが見かねて、口を出すと、赤く濁った眼は異常な輝きを見せ始めるのである。老臣たちはそれで沈黙した。それ以上いうと信虎の眼は狂い出して、ついには無礼者と叫ぶ声も、うわずった怒号となって太刀に手をかける。信虎の狂刀のもとに憤死した家臣は四人や五人ではなかった。

甲斐の国人（地方の豪族）として、代々武田家に仕えていた前島繁勝が、今川義元に叛旗をひるがえして、甲斐へ逃げこんで来た者たちをかくまったという理由で、一族ことごとくを切腹させたのは四年前の天文五年のことであった。信虎に愛想をつかして、武田家の奉行衆が出国したのもついこの間のことであった。

晴信は、父のことを考えながら馬を走らせていると、なにか、父の向けた刺客に追跡されているような気がして来

るのである。
「晴信を殺せ、あの臆病者を殺せ」
父信虎がひとこと言えば、そのことは確実に遂行されるのである。それが、戦国のならいであり、そうしなければ、その命令に反した者が処刑されるのである。
(父の眼は濁り、父の頭は決して尋常ではない、しかし今は父が甲斐の国を治めているのである)
だからといって、晴信は父の手にかかって、命を落したくはなかった。
(ではいったいどうしたらいいのか、父の元をはなれて、他国へ亡命するか、それとも、父を……)
晴信は、背筋につめたいものを感じた、とんでもないことである。たとえ家臣たちがこぞって、父を討てと言っても、父を助けるのが子の義務である。
晴信は馬に鞭をあてた。馬を走れるだけ走らせ、耳をかすめていく、つめたい風に、信虎の長男として生れた身の不遇を嘆きながら、板垣信方が、
(晴信様、いましばらく、いましばらく、お待ち下さい)
といった言葉を思いうかべていた。
馬がなにものかに驚いたように、突然歩調を乱し、あっという間に後足で立上った。
馬前に三十人あまりの男や女が土下座していた。ほとんどが、はだしだった。やぶれた衣服をまとい、やせおとろえて、眼だけが光っていた。馬はいなないて停止した。
「何者だ、無礼であるぞ」
あとから追いついて来た石和甚三郎と塩津与兵衛が馬上で怒鳴ったが、道に坐った郷民は動かなかった。
「晴信様とお見かけして、お願い申しあげます」
人垣の中から老人が進み出ていった。
晴信は馬からおりた。
「いって見るがいい」
晴信はそこに居並ぶ者たちが土色に近い顔をしてふるえているのを見て、彼等が死を覚悟でなにかいいに来たのに違いないと思った。すぐ父信虎のことが頭に浮んだ。
「晴信様は京都より奥方様を迎えられ既にお子様を設けられましたことゆえ、お察しいただけることと存じますが、もしかりに、鬼が出来して、奥方様のお腹を割いて胎児を取出そうとしたならば、晴信様はいかがなさいますか、おそらくその鬼を斬ってお捨てになるだろうと存じます。晴信様、その鬼がこの国の領主に乗り移ったのでございます。御領主様信虎様に鬼が乗り移ったため、信虎様は、生きた孕み女の腹を割いて、胎児をあらためたのでございます。ひとりふたりではございません、すでに三人が鬼のために、胎児とともども命を落したのでございます」

老人は晴信の顔を見詰めて、まばたきひとつせずにいいつづけた。

「われわれは領主様に年貢をおさめ、使役にこたえ、戦場に出ては命をささげて参りましたが、罪もない領民をかようなむごい殺し方をなさるようでは、もはや、領主様のいうことを聞くわけには参りません。晴信様、お願いでございます、どうぞこの国から鬼を追出して下さいませ。信虎様を追出すのではございません、信虎様に乗り移った鬼を追出すのでございます」

老人が土に額をつけると、そこにいならぶ者たちはことごとくそれにならった。

晴信は答えに窮した。よし鬼を追出してやるとは言えなかった。鬼を追出すより、鬼のようなことを父がやったことに居たたまれぬ恥ずかしさを覚えた。それが事実であれば鬼畜の行為であった。もはや狂人以外のなにものでもなかった。

その鬼畜の血を受けついだ自分が恥ずかしかった。

晴信は馬の轡を取って、ぐるりと一回転すると、ひらりと馬上の人となり、鞭を当てた。郷民たちの怨嗟の声が天をおおう呪詛のように、地を這って、晴信のあとを追った。

晴信はどこをどう走ったのかおぼえてはいなかった。われにかえったとき、彼は躑躅が崎の館の前に来ていた。

晴信は乱れた呼吸を整えながら、数年前に彼のために建てられた新館の前で馬をおりると、そこで、もう一度さっき、老人がいったあのおそるべきことを思い浮べた。

「恐ろしいことだ」

と晴信はつぶやいて、すぐ彼のあとを追って来る石和甚三郎と塩津与兵衛の方へ眼をやった。二人の家来も青ざめていた。なにか不始末でもしでかしたかのように、晴信の足下に並んで膝をつくと、首を垂れたままで、主人のことばを待っていた。

「知っていたのだな、ふたりとも」

ふたりは、低い、せつなそうな声を合わせて知っておりましたとこたえた。

「なぜ話してくれなかったのだ」

ふたりは返事をしなかった。あのようなことは、たとえ事実であろうとも、御曹子の耳には入れたくなかったのだという顔だった。

「信方も知っておろうな」

晴信は、その答えを、ふたりに求めるのではなく、板垣信方のみならず、このことは武田の諸将のことごとくが知り、甲斐の国中の人の口の端にのぼっているのではないかと思った。

「困ったことだ」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

晴信ははっきりいった。父の鬼畜的行為が国中に知れわたれば、人心は武田から離反する。父信虎は剣と馬によって甲斐の豪族を斬り従えて、やっと統一したのに、その頂点において、また昔のままの状態になることは無念でならなかった。困ったことだと、晴信が口に出したことは、晴信がやがて、父より受けつぐべき甲斐の領主としての発言であった。

ふたりは、晴信の口もとをじっと見詰めたまま黙っていた。

「困ったことだ、ほんとうに困ったことだ」

晴信はふたりにそのことばを残して館の中へ入っていった。おそらくこのことばが、ふたりによって信方に伝えられるだろうと思った。

「晴信様、御気づきなされましたか」

信方がそういってにじりよって来る姿が見えるようだった。

(あいつはそのうちきっとこの俺に父にそむけというに違いない)

そう思うと晴信の気持はいよいよ暗くなるばかりだった。

晴信は正室の三条氏の居室の前で足をとめると、暮れたばかりの庭に眼をやっていた。桜が散ったばかりで、桜にかわって庭を飾る花はなく、なにかものさびしく陰鬱だった。まだいっせいに芽吹くには早いけれど、ここ十日ほども立てば、萌黄色に塗りこめられるであろう庭の植込みは、黒々と翳を飲んで、なにものかが、そのあたりに、じっとひそんでいるように暗かった。

晴信は、暗い庭は、そのまま彼自身の心の暗さを示しているように考えた。石水寺への途中で会った人たちの顔とことばが、いまもって彼の頭からは去らないのである。

静かに部屋の中から戸の開かれる音がした。

晴信は庭の方から正室三条氏の居室の方へ眼をやった。部屋の中は庭よりも暗かったが、その中で、端坐している三条氏の顔だけが白く浮き出して見えた。

「暗いな」

と晴信がいった。そろそろ、あかりをつけてもいいではないかといおうとしたのであるが、三条氏はそれには気づかぬふりをして、

「暗いのは、あなた様の顔色でございます。どうなさいました。ひどく心配そうなご様子でございますが」

心配そうな御様子と口ではいいながら、三条氏の顔にはいっこう、心配そうな表情の動きはなく、いつもと同じように、身ゆるぎもせず、きちんと坐ったままで真直ぐな視線を晴信に向けていた。

「いやな目にあった」
と晴信はひとことといった。
「いやな目？　いやなことなら、わたしにとっては毎日毎日いやなことつづきでございます。ここにはなにひとつとして楽しいということはございません」
京都に比較すると、こんな片田舎は、問題にすべくもなく単調であり、呼吸も止るほどにつまらないのだとは言わず、そういう忿懣をすべて、つめたい顔の中におしかくして、抽象的にしか表現しない、京都の公卿の娘の三条氏は、晴信が、夫としてのくつろぎを取戻して、彼女の近くにまで膝をすすめたときも、
「そのいやな目にあったお話をしていただけませんか」
といった。
「話さないほうがいいだろう。話せば、誰でもいやな気持になる話だから」
晴信はさらりとやりすごしながら、なにかほかのこの場に適当な話題を探し出そうとした。
侍女のおここが燭台に火をつけたので部屋は急に明るくなった。
「いやな気持になってもかまいませぬ、ぜひともそのお話をうかがわせていただきたいと思います」
三条氏の細い眼の奥で鋭く光っているものが見えた。
「では申しましょう」
晴信は、彼の前に、彼よりも偉そうな顔をして坐っている三条氏には、なにか一目置いていた。三条左大臣公頼の娘という格の高さで、天下って来たときからそうであった。三年前の晴信が十六歳の時今川氏親がこの婚姻を取り持って、わざわざ京都から正室として迎えた三条氏は晴信より三つ年上の十九歳だった。京都の公卿の出だから、さぞかし、色白で面長で、小柄で可愛いあどけない顔をした女だろうと想像していた晴信は、色だけは白いが、それ以外は、すべて彼の想像とは似ても似つかない、大きな顔で、大きな図体で、細いきつい眼をした、義理にも器量がいいとはいえない三条氏を見たとき、晴信は政略結婚のむなしさを身にしみて感じたのである。
「実はきょう、馬を走らせていると、突然郷民たちが地面にひざまずいて行先をはばんだ……」
晴信は三条氏の膝のあたりを見ながら話しだした。
「まあ、無礼な、斬り捨てられましたか」
いや、といって晴信は、三条氏がいとも無雑作に斬り捨てたかといったのに驚いて眼を上げた。三条氏はごく自然な顔をしていた。晴信は驚いた眼でゆっくりまばたきをしながら、おそらく、この公卿の娘は、人を斬ることがいかに悲惨なものだか知らないから、そんなことをいうのだろ

うと思った。
「郷民たちは父上のことで訴願したのだ」
そう前置きして、晴信は父信虎の行状について話しだしたけれど、信虎が孕み女の腹を割いて胎児をあらためたという段になると、さすがにむごすぎるので言葉がとだえた。
「何人の女の腹をさかれたのですか」
しかし、三条氏はその話に少しも動ぜずにいった。
「三人と聞きました」
「たった三人だけですか、でもお館様は奇妙なことをやられたものよ」
そして三条氏は、彼女のかたわらにひかえている、侍女のおここの方へ眼をやった。おここは、晴信がその話を始めたときから、おそろしさのためにふるえつづけていた。ふるえおののく、おここの方を三条氏はちらりと見て、口元に薄笑いを洩らしながら、
「おここにはこの話がこわいのですか」
といった。
晴信は、三条氏の口元に浮んだ笑いから、彼女の底知れない冷酷さを見て取ったような気がした。冷酷なのか、感情が凍結しているのか、どこをつついても、三条氏には女らしいあたたか味は見出されなかった。
「それだけでございますか」
三条氏は話の先を催促した。
「それだけだ」
「おおおおつまらないこと」
三条氏は、その話だけがつまらないのではなく、その話を持ちこんだ夫までがつまらない人間であるかのように言ってのけると、ぷいと横を向いた。
「つまらないか、この話が——」
晴信は立上った。なにか、反射的に三条氏の傍をはなれざるを得ない気持だった。そうしないと、その場のつめたい沈んだ空気の中で窒息してしまいそうだった。
「おやもうおかえりなされますか、では、おここに送らせましょう」
三条氏はひややかにいった。そこにとどまれとはいわなかった、わたしがいやなら、どこへでもいって寝るがいいと、突きはなした格好でさらにひとこといった。
「よい夢をごらんあそばせ」
晴信は三条氏の声をうしろに聞いて廊下に出た。彼のあとを、あかりを持ってついて来るおここの足音がこきざみに聞えた。晴信が居室に入ると、おここは持って来た火を、彼の部屋の燭台に移した。おここの手元が未だにふるえていた。
「あの話がこわかったのか」

晴信がそう問いかけると、おここは素直にはいと答えて、姿勢を正すと、叱られた者のように深く頭をさげた。
おここの項の白さと、軽々と片手にでも持ち上りそうな、小さな身体が晴信の眼を惹いた。
（誰かに似ているな）
と思った。そしてすぐ、彼は、彼が十三歳の時、父信虎に無理矢理におしつけられた政略結婚の相手の上杉朝興の娘、於満津を思い出した。於満津は一つ年上の十四であった。結婚は政略以外には行われないという世の中に生れ出たふたりであった。みじめな結婚だった。於満津はよく泣く女だった。上杉家から従いて来た侍女に、結婚とはこうするものであると教えられて、晴信と同じ褥に入ると、きっと泣いた。その泣き虫の於満津も、晴信と同じ衾に三つきも寝ると、泣かずに晴信の胸の中に顔を埋めるようになった。そして、於満津は妊娠したが、その胎児を生むことができず、胎児もろとも死んだのである。
晴信はその於満津をふびんに思っていた。そして、於満津が死んでから、五年もたったいまになって、その於満津のおもかげに似た女を求めている自分を発見してあわてた。
おここは燭台に火を点ずると晴信の前を去ろうとした。
「おここ、いまもこわいようだったら、こわくないようにしてやろう」
晴信はそういって、手を延ばして、おここの手を引いた。熱っぽい手であった。しきりに身をもだえながらも、声もあげられず、ずるずると晴信の膝に抱きよせられていったおここは小さな声でお許し下さいといった。
その声が、於満津のささやきとよく似ていた。於満津は、抱擁の間中、よくそのことばを口にした。お許し下さい、お許し下さいといいながら、ついに、許されずに死んでいったのである。子供をみごもる能力があっても、女としての悦びはついに与えられずに死んでいった。それを知ったとしても、やはり、そのときは於満津はお許し下さいと身体を固くしていうだろうと晴信は思った。於満津はつつしみ深い、ひかえ目な女だった。
「いや許さない、おここはいつまでもそばに置くのだ」
晴信は腕に力をこめた。於満津を抱きしめた時は十三であったが今は十九歳の盛りであった。京都から、三条氏の侍女としてついて来たおここは十七歳であった。
翌朝晴信は三条氏にいった。
「おここを側女にしたい」
晴信は、それまで一度も言ったことのない、半ば命令的な口調でいった。
「そのようなことはわざわざ、私にことわるには及びません」

三条氏は青白く引きしまった顔でいった。細い眼の中に赤い炎が燃えていた。晴信は、三条氏の顔を見おろしながら、つめたい三条氏の肌と、火のように熱いおここの体温との差に、二様の女を見詰めていた。

信虎は歌会の席に晴信の姿が見えないことで、ひどくつむじを曲げていた。

「晴信はなぜ来ないのだ、わざわざ京都から北川基房殿をおまねきしての歌会に、たった一度出ただけで、その後はとんと顔を見せないのはなぜだ」

信虎は板垣信方にいった。

「晴信様は、このごろ御病気の様子にて……」

信方はごまかしようがないから、病気だと逃げた。

「嘘をつけ、晴信は、きのうも栗毛を乗り廻していたそうではないか。それとも病気というのは、女狂いの病気をさすのか」

信虎は、京都より招いた北川基房を始めとして、主なる家臣がいならぶ前でそんないい方をした。信方は自分が叱られているように恐縮して頭をさげながら、信虎が晴信のことを女狂いといったのは、おここのことを耳にしたからだろうと思った。晴信が、おここに一室を与え、ここにしげしげ通うようになったことを知っているのは晴信の館の者と信方ぐらいのものである。館の女たちは口がかたいから、主君の閨房のことを外へ洩らすようなことはない。信虎の耳におここのことが入った経路は、おそらく三条氏からであろう。三条氏を晴信の正室として迎えたのは信虎であり、三条氏は、夫の晴信より、舅の信虎を権力ある庇護者と見ていた。だから、晴信がおここに手を出したことは、早速信虎に報告したに違いなかった。

「近ごろの晴信の行動を見ると、まるで、ばかかあほうだな」

信虎は続けて晴信の悪口をいった。

「この前の歌会であいつの作った歌といったら、まるでなってはいない。少し信繁でも見習うといいのだが、あいつは、努力するということを知らないのだ、一度歌会に出てうまくいかなんだらもう二度と出ようとしない腑甲斐ない奴だ。それに今から、女にうつつをぬかすようでは」

信虎はそこまでいったが、板垣信方が上げた意味ありげな眼に、やっと、この席に客人がいることに気がついたのか、

「まあいい、今日はいいが、明日の歌会に出なかったらこの父が許さないぞと晴信に言ってまいれ、いますぐ行っていうのだ」

信方は承知いたしましたと信虎の許を辞すと、その足で

晴信の新館へいった。
「お館様のお使いで参りました」
信方は多くの人に聞えるようにいった。晴信は書見中であった。
「歌会へ出ないというので父が怒っているのだろう」
晴信は笑っていた。笑うと、晴信の顔にはまだ幼な顔が見えるほど若々しく輝いていた。
「ちゃんと知っていて出席なさらないのでは、はたが迷惑いたします。晴信様は歌がほんとうにお嫌いなのですか」
「いや、歌が嫌いなのではない、歌は好きだ。今読んでいる本も歌の本だ。歌は好きだが、京都から来られた御人が嫌いなのだ。父は何かというと京都の人を呼びたがる。去年も冷泉為和殿を京都から迎えて歌会をやった。父は相手が京都の人だとなると、人間が一段、上等にできているとでも思っているらしい。ばかばかしいってない、全く同じ人間だ。いかにも、今当家へ来ている北川基房という御人は歌がうまい、それは歌を食い物にして、諸国諸侯を渡り歩いているからだ。歌だけならいいが、あの連中と来たら歌を売物にしながら、諸国の情勢を探り歩いて、都合のいい方へ売り渡すのだ、油断も隙もない奴等だ」
晴信はけろりとした顔でいった。とても十九歳の青年には言えそうもない言葉を平気でいっている晴信を見ながら板垣信方は、この晴信の洞察力にたのもしさを感じた。
「でも明日の歌会には出ていただかないと、拙者がこまります」
信方がいった。
「分った。しかし歌会に出て、父に、信繁の歌はうまい、同じ兄弟でも晴信の歌は歌ではない鵜の寝言みたようなものだと、怒鳴られるのはつらい。怒鳴られても、ばかになっているのは尚更つらいことだ、だから歌会には出たくないのだ」
晴信は机からはなれて背延びをしながらいった。
「いましばらくの、御忍従をお願い申し上げます。いましばらくは、表面に出るようなことはなるべくおさけになるように……晴信様の才分については家臣一同が認めています。お館様もそれを知りながら、なんとかして、晴信様をしりぞけ、信繁様をお世継にしようと思っておられるのです。つまり、晴信様の落度を探しておられるのです、きっかけを待っているのですから、今のところは、ごくひかえ目になされていることが肝要かと存じます。いまは、ただのんびりとお過し下さればよいのです。にわかばかの真似をしたり、妙に変ったことをすれば、かえってそれが狂言と見られますから御用心のほどを。ましてや、女狂いなどあそばされると……」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo